

(7) 荷役会社経営者のオーラルヒストリー

語り手：中山弘文（株式会社五菱会長）

1941 年 11 月 15 日生

聞き手：田上繁、森武麿、若宮幸一、藤川美代子

近石哲、平田茉莉子

同 席：渋谷幸子

聞き取り日：2011 年 8 月 3 日

場 所：(株)五菱（若松区本町）

沖仲仕とゴンゾウ

中山： 普通、若松で一般的にゴンゾウっていったら、陸のゴンゾウを指すんですね。沖仲仕は、沖仲仕、沖仲仕っていった。

渋谷： ああ、そうですか。わたし、ゴンゾウがあれかと思いました。

中山： はい。普通は、大体われわれのこう、仲間の呼び方では、そうなんです。沖仲仕と。陸でこう担いだりするの、ゴンゾウって呼んで。

田上： ゴンゾウと沖仲仕は、別の。

中山： わたしたちは、こう別の範疇で考えてましたね。携わってる者はですね。で、一般的に、世間の人、総称してゴンゾウっていわれるんですよ。

渋谷： ハシケから本船に、あの荷を揚げるのが、沖仲仕？

中山： そうです、そうです。沖仲仕。

渋谷： で、陸からハシケにあのー。

中山： 積み込んだりするの、ゴンゾウ。だから、陸の仲仕ってはいわなかったんですよ。だから一般にもうゴンゾウ、ゴンゾウって呼んでるんです。

沿岸荷役の組制度

田上： 組というのは、最盛期はいくつもあったん

ですか。それほど？

中山： 数え切れないぐらいです。

田上： 数え切れないぐらいだった、何人ぐらいが単位だった？

中山： 多分 2～3 人でも組というんですね。

田上： なるほど。複数になればもう組で。

中山： はい、はい。だから、大きな組はやっぱり 20～30 人の人間をもって。

渋谷： そうですね。ほいで、飯場もあったですね。それが。

中山： そういう何人かの組が、ちょっとした会社に所属してまして。そういう仕事を。例えば、「大庭組はどこどこ。若松のどここの荷役をしますよ」とか、「仕事をしますよ」というふうに。大体は、こう分かれてたんですね。はい。

田上： それをお願いするというのは、海運会社とか。

中山： 要するに、今いうわたしどもの会社であるとかですね、五菱なら五菱が。もう五菱には組という単位じゃなくて、五菱の会社そのものが 30 人なら 30 人ぐらいを持ってたんですけどね。もうその時代です。だから、昭和 29 年、30 年ぐらいになるとですね、組というのもほとんど会社の方に吸収されて。例えば、若松港運の、第一港運の前身は若松

港運なんですよ。ね。だから、そういうところに、大体昔は第一港運さんなんかの、大庭組であるとか、橋口、道免（どうめん）とか、そういうふうにして、そんな組があったでしたね。

渋谷： 4 個ぐらい組があったけど。あとはもう、解散してから、直接その仲仕を？

中山： そうです。はい。

渋谷： 会社の従業員っちゅうか、そんなの？

中山： そうです。昔は組織になったのが、ちょうどその辺なんですね。

渋谷： でないと、その親方がそのピンはねするでしょう。だから。

森： 社員になるわけですか。

中山： そうですね。

田上： 従業員になる。そのときには、何人ぐらいいらしたんですか。

中山： そうですねえ。わたしの方は、まあ、20 人ぐらいから 30 人ぐらいの社員といいながら、要するに常用と日雇いと。だから、いっぱいしのゴンゾウといえますかね、一匹狼的な存在のゴンゾウは、どこに行っても仕事できるんですね。だから、弁当箱 1 つここに下げて、掛けてですね、担いでね、「仕事ありますかー」って。ほんとにもうそこからずーっと沿岸を入れて行くんですね、「ああ、今日はあるから寄ってください」っていうと、そこでまた仕事をして、その日は終わって、もう次の日はまた違うところに行くとか。

田上： 日替わりで。

中山： いわゆる、これはワリコミっていうふうに。要するに、割って入るから、ワリコミ。そういうふうにして、自分のもう腕に。だから、毎日そういう仕事があったんですね。

田上： それは、ゴンゾウ。沖仲仕も同じですか。

中山： 沖仲仕はほら、ある程度の組で。

田上： でないと。

中山： でしたでしょうね。

ゴンゾウの仕事・賃金と生活

中山： 沖仲仕の人はですね、割とスコップが中心の仕事なんですね。それで、バイスケとかなんとかそういうものに入れながら、こう手渡しするんですよ、陸のゴンゾウっていうのはですね。われわれ天秤棒ですね、六尺棒って普通なんですけど。六尺棒で担いで、若松の場合は、ヒラカゴっていうんですけど。このぐらいの、しち……70 センチぐらいの丸いカゴを 2 つですね。それにガンゾメっていう鍬で、こう入れてですね。

田上： それ、何キロぐらいになるんですか。

中山： 軽い。通常、担いでるのは、たぶん 72 ～ 3 キロだと思います。

近石： 両方でですか。

中山： 両方天秤だったと思います。はい。

田上： ああ。2 つで 72 ～ 3 キロね。

中山： はい。だから、重たいものは、もう 100 キロ入るんですよ。

渋谷： 前後ろですかね。それとも右左？

中山： いや、斜めです。担いだら、こういう形に。こう、後ろは、後ろの方は、こういう形。前は、こういう形。こう、後ろは持たなくてもいいんですけど。ちょっとこう拍子を付けながらね。だから、こうでもないし、で、こうでもないんですねえ。やっぱり、こうはならない。斜に構える感じで。

渋谷： ふーん。と、ちょっと形がちごうとったもんね。普通のあのお豆腐とか売るあんなのとは。

田上： そして、これをひっくり返す技術もいるんですね。

中山： はい。だから若松のゴンゾウさんは、ヒラカゴを担ぐ人たちはですね。天秤棒をそのままにして、カゴをパッと返して、そしたら、こう今度は反ってる棒でも、絶対ひっく

り返らないのが技術なんですね。

田上： ひっくり返らないのがね。それがガタンとなるようじゃ、まだ未熟なんだ。

中山： はい。だが、おんなじゴンゾウでも違うんです。ちょうど黒崎の方に行くとですね、この、こんぐらいのカゴの深いカゴに、ちょっと重量がよけい入るんですけども。それはもう、六尺に結びつけてあるんです。最初から両方のとこへ。ほいで、向こうに行ったら、それを後ろで、こうコトンと、あれごと落とすんです。六尺、あの、天秤棒ごと。

田上： 天秤棒ごと、肩から？

中山： ええ、はい。で、こうして手前に移して、ここんどこに返るようになっているんですよ。だから、あのところどころで、場所で随分形の違うように担いでたんです。

浜田： やっぱり、テクニクですよ。

田上： それは、黒崎？

中山： ええ。黒崎に行くと、大体そういうふうには。はい。

田上： 黒崎の、こういうふうには。その場合は深い。

中山： マルカゴっていつてました。

近石： ヒラカゴとマルカゴの違い。

中山： はい。で、まったく使わないゴンゾウさんもいらっしゃった訳ですよ。マルカタっていつてですねえ。直にやるのと、袋物を担ぐゴンゾウが。特に明糖、明治製糖ありますでしょ。

浜田： ああ。あの大豆とか、砂糖とかですね。

中山： 袋物を担ぐゴンゾウさんっていうのが、また別にいらっしゃったんです。

浜田： そう、そう。なんか肩にカバーのような、ね。

中山： そうです。

浜田： ごっついので、その上に袋をね、10キロか20キロか知らん。覚えてます。

中山： だからね、あの重たいのは100キロぐらい、そのまま担ぐんです。担いで。

近石： 麻袋のですか。

中山： ええ、ええ。やっぱり、本船荷役とか、そういう荷役もやってたんです。うん。非常に上手にですね。降ろすのなんかでも、1人でパタ、パタ、パタッて、もう3つぐらい、きれーいに並ぶように落としてたんですね。

田上： それは、石炭ではなくて？

中山： ええ。それは砂糖とかですね、豆であるとか、塩であるとか。

中山： 担ぐ時代と、それからリヤカーっていうのが、その次なんですけど。その次がコンベアーといくんですけど。そのときの労力で全然違うんですね、担いで。いわゆるゴンゾウ想像されたら、たぶん担ぐことをいわれてるんだと思いますけど。担ぐ時代は、1人ですね、大体1日50トン担げるんです。トラック5台ぐらい担ぐんです。今のでいうと、トラック5台ぐらいを1人で担ぐんです。

田上： それ朝から？

中山： ええ。そうじゃないと、一人前のゴンゾウじゃないんです。

田上： 50トン運ぶのには、大体何時間ぐらい？

中山： それでですね、大体120トンの船がありましたね。っていったら、やっぱり朝の、今どきですと、朝早いうちからしたいんですね。昼間の暑いときするよりは。だから、「じゃあ朝7時から始めましたね」っていったら、昼すぎに120トンぐらいの船だったら満船になります。8、9、10、11、12っていったら、5時間で。それで人間が、大体担ぐ人が3人か4人で。

田上： ハシケは何台も、何艘もいたら。

中山： そういうあの栈橋なんかでは、どんどん次から次に積みますけど。そういうゴンゾウが積む荷役っていうのは、大体1日1杯やったら、大体終わりですね。それで十分お金に

なります。

田上： 無理すぎて体壊すより。

中山： はい、はい。

田上： 半日。

中山： だから、そのために時間を「涼しいうちにやりましょう」って。「何時出勤の何時で終わりですよ」っていうのは、ないんですよ。やり切りの仕事ですから。はい。だから、自分の一番コンディションのいい時間で、積み上げてしまうというのが、大体通常ですね。

田上： 4～5人で。

中山： はい。だから、それが120トンぐらいの船までだったら、大体3～4人担ぐ人がおって、おなご、女の人が2人か3人、やっぱおなじぐらいの数ですね。それから、船が少しずつ大きくなってくると、人数が増えていくという。

田上： その男の人の3～4人のうちに、1人がボーシンっていうか。

中山： はい。束ねる人がいるという。

近石： その人たちは仕事しないんですか。

中山： いや、します。まあ年とって、今度は親方たちに呼ばれるような人は、もう仕事しませんけど。

近石： 管理職ですか。

中山： はい。

田上： 五菱さんみたいなのが、そこへ見に行っ
て、ちゃんと監督しとくというようなことはあるんですか。

中山： はい、そうですね。はい。わたしはもう若いときでしたから、一緒になって担いでましたけど。

田上： それで覚えられた。

近石： で、次のリヤカーてのは？

中山： リヤカーてのはですね、ちょうど箱型ですね。今いったあれが70キロぐらいですね。そしたら、箱になると、リヤカーていうのは

ですね、まったく木の箱、あるいは鉄の箱を造るんです。そうすると、大体その中に180キロから200キロ入るんです。ええ、1箱で。それは全部、男の人、女の人が、全部スコップで貯炭場からその箱の中に入れるんですね。そしたら、それを押して、今いう船にこう逆にいったら、こう歩み板でこう行ったり来たりしてたでしょう。この上に、今度はリヤカー板というのを引くんです。渡すんですね。で、急なときは、1人手前に1人おりましてね、1人が引いて来たものを、今度は加勢して、押し上げてやるんですね。押し上げ専門の人もいます。はい。

田上： 4輪車？

中山： いえ、2輪です。そしたら、一番とっさ、一番先のところは、これぐらいの歯止めがこう打ってあるんですね。その歯止めの手前で、ポンッと底にですね、こういうふうなものがこう、付いてるんです、ハンドルが。ほいで、ここの前が蓋になっているんですよ。前からが開くようになってる。で、これももちろん、こういうふうにL字型になっているんです。それを手で開けたり、足で蹴ったり、ポンッとこうやって倒すと、倒して、ちょっとこう傾けると、今まで走ってきた勢いとあれで、中身をポンッと転がして。

近石： 押し出す。

田上： 下手なのがいたら、自分も。

中山： その者も。もうタイミングが悪いと一緒に海の中に飛び込んでしまいますねえ。

近石： 1日は時間で働くんですか、それとも、行った回数。このゴンゾウさんが船に。

中山： 基本的には時間ですね。朝何時から何時までというように決まってるんですね。

近石： 回数をゆっくりしたら得だとか、そういうのはないんですか。

中山： あれはですね。そんなことはできないよう

に、ちゃんとなってるんです。全部、請け単価です。トン数で。

近石： あっ、この山を運ばないと。

中山： はい。だから、何トンやったから、いくらですよ、というのを、要するにその日の売り上げで。

近石： ああ、出来高で。

中山： 親方がみんなに、こう配って。

近石： ああ、じゃあできないですねえ、そんなに、ずるは。

田上： 日払いですか。

中山： ほとんど日払い。

田上： 日払いねえ。日払いねえ。だから、さっきいったみたいな、ワリコミの人も、そこで働いたらその場でもらうから、次の日は来ても来なくても構わない。

中山： はい。最初の方はほとんど日払いですね。

田上： 日払い。

中山： 後半っていいですか、今いう会社組織になってからは、日払いのところと、月給、あるいは後からというようなまとめるところが、それから後に出てきましたですね。

渋谷： それとか、その班の親方に会社が一括して、そして、その。

中山： そうですね。その組があるあいだはですね。

渋谷： ほいで、1人1万5千円ぐらい。1万5千円、会社に要求するやないですか。ほいで、だけど、親方が本人に渡すのは1万で、自分は5千円って（笑う）。そう、そんなだったんですよ。

中山： （笑う）。それはありうる。

近石： で、変な話ですけど、当時としては給料はいいんですか、1日の。

中山： いやあ、若松のゴンゾウは、すごい給料がよかったんです。稼ぎがよくてですね（笑う）。だから、わたしの印象ではですね、夫婦ものが多かったんですね。ゴンゾウさんね。ただ、オヤジはですね、稼いだお金をそ

の日のうちに使ってくるんです。呑んじゃったりね。

田上： （笑う）。奥さんがいないと。

中山： だから、母ちゃんは自分の稼いだ金で、所帯をつないでいくんです。

藤川： 奥さんもゴンゾウさんやってる？

中山： そうですね。担ぐことはありませんけど、今いう入鋤（いれくわ）というふうに。「わたしがガンヅメでカゴの中に入れますよ」っていうふうな感じでしょ。あれであるとか、本船の中はもちろん、スコップでかいたりですね。まあ、よくカゴを手渡しで、こう渡したりというのは、女性でもできる訳なんですね。そんなに重いもんじゃありませんからね。はい。

藤川： じゃあ、女性と男性でちょっとお金が、もらえるお金とかは変わるんですか。

中山： もう、全然違います。普通はもう、普通のところだったら、もう5分ですね。男の人の半分。で、「仕事ができるよ、この人は、仕事ができるよ」という人は、7分という。それ以上はなかったですね。

近石： 男女差別が激しいってことですね。

藤川： 仕事が違いますもんね、重さとかも。

近石： これはやらないって、女の人。カゴに入れ込む。はい、はい。

田上： ガンヅメとかでね。そうですか。

中山： 入鋤さんって、陸の場合はですね、入鋤さん。こういう人の腕次第で、荷役の能力が凄く違うんです。

藤川： ゴンゾウさん、男の人のゴンゾウさんでも、やっぱり出来によって、給料が違うんですか？

中山： いやあ、全然違います。はい、だから、今いうワリコミ、ワリコミさんっていうんですか、その人たちは、常用の人たちより、若干給料がよかったんです。

近石： それ、どう、尺度はなんですか、できる、

できないの？

中山： やっぱり、能力ははっきり分かりますでしょう。力ですから。

近石： 重いもん持てるとか。

中山： はい。おなじようなもんでも、やっぱり上手であるとかですね、段取りよくできるとかですね。

近石： はい、はい。ひっくり返さないとか。

中山： それから、ばてない（笑）。要するに、まじめで、まじめにずーっと。

近石： 勤勉ですね。

中山： 勤勉にやると。やっぱり人間のやる仕事ですから、弱い人は、どうしても途中で休みますよね。休みますって、座っては休まないんですけど、おしっこの回数が増えたりね。能力っていうか、能力の査定っていうのは、いつも使って、見てるからですね。

近石： 分かる？

田上： それは組の親方が？

中山： そうですね、はい。使う側の方がよく見えますから。

田上： 大体その始められて、昭和30年ごろというのは、1日、普通のあれですと、いくらぐらいの日給になったんですか。

中山： えっとですね、ニコヨンっていう言葉がありましたね。あれ、要するにですね。よく分かりませんが、アブレっていうふうに、仕事がない人たちがですね、職安に行ってもらうのが、大体わたしたちはそのニコヨンよりちょっと上だったと思うんです。300円ぐらいでもらってたと思うんですね。300円あったら、十分1日食えるっていうあれですね。そのころに、やっぱり、よく稼ぐ人は1000円ぐらい稼いでましたね。だから、普通のサラリーマンは多分、その中間じゃないでしょうか。

近石： はあ、500円ぐらいですか。じゃあ、サラリーマンの倍ですね。

中山： はい、稼いでますね、仕事して。

田上： ほほう。でも、サラリーマンよりか、まあ300円ぐらいが平均だとすると、サラリーマンが500円ぐらいもらえて、やっぱり下ですか。

中山： アブレっていう、まあ、その失業保険代わりにもらう金がありましたね。それがわたしたちが確か、昭和35～6年で、確か300円ぐらいじゃなかったんでしょうかねえ。そんなぐらいだったと思いますけど。昭和35年か6年ぐらいですねえ。もう昭和40年近くになると、ほとんどゴンゾウいなくなるんです。斜陽で、石炭の斜陽ですね。要するに、担げるゴンゾウっていなくなって、だんだん、だんだん、機械に変わって行って、大量の荷物扱うようになるから。そんなになると、人間、ゴンゾウ要らないですから。会社が、会社へ、要するに社員として雇って、というふうになってくるんですね。

森： 機械のね。

中山： ええ。機械を主体とするようになったと。

森： さっきの一匹狼ゴンゾウは、いくらぐらいなんですか。

中山： ええ、もう1000円もらうときは、1100円であるとか。ええ、1割か、1割5分ぐらいの割り増しですね。

森： すると、女は500円ぐらいですか。

中山： そのころは、そう、半分ですね。

森： やっぱり違うんですね。

中山： 違います。

近石： で、昭和40年代になると、もう機械化されるということですね。

中山： ええ、もうどんどん、どんどん機械化されていきますので、されていきましたんで。もう、担ぐっていうことが、本当になくなっていきますですね。

森： ゴンゾウさんはどの辺から来たかっていう

と、遠く広島とか？

中山： ええ、そうなんです。もちろん地元の人
もいらっしゃるんですよ。地元の人が大半な
んですけど、犯罪を犯して、この町に流れ込
んで。要するに、時効になるまで姿を隠して
るとかね。そういう方たくさんいらっしゃい
ました。

田上： そうですね。

中山： はい。あるいは、もうまったく、わたしの
ところに安田さんという方がおったんですね。
その方は、大阪の商家の長男坊だったんです
けど、ご存知かも分かりませんが、ちょ
うど、わたしたちが青年のころ、「安田三兄
弟」って、ボクシングの兄弟がいたんです。
で、その人、長男だったんです、この人は。
詩人ですね。それこそ、火野葦平さんの友だ
ちなんです。その方が、やっぱりあの北樺太
から沖縄までアンコ、アンコで歩きながら、
詩をこう詠んでた。結局、若松に居ついたん
です。はい。そういう方も、いらっしゃいま
した。

渋谷： その方も、ゴンゾウなの？

中山： ええ、もうゴンゾウ、立派なゴンゾウでし
た。

田上： アンコっていうのは、これ。

中山： 要するに、ゴンゾウのことを、場所によっ
てはアンコっていうんですね。

渋谷： そうなんです。

中山： ええ。大阪の方にいれば、みんなアンコっ
て。

渋谷： ゴンゾウ、イコール、アンコ？

田上： 大阪では？

中山： おんなじ。多分仕事内容だったと思います
よ。

近石： 港湾荷役。

中山： そうですね。もう、いろんなことちょっと
よく分かりませんが、そういうことがあっ
たということですね。

森： 全国を回る港湾荷役の人って、プロの人っ
ていたんですか。

中山： ええ。要するに、そういう人たちは、その
土地その土地を回ること、自分の文学を高
めたり、というあれでしょ。だから、そうい
う方もいらっしゃるんです。今また、それと
は逆に犯罪犯したやつね、犯した人もいた訳
ですね。

渋谷： 荒くれもんが多いけえ、もう日銭を、宵越
しの金を持たんで。

中山： ええ。江戸っ子みたいなのところがある。

渋谷： そして、「ゴンゾウ殺すにゃ刃物はいら
ぬ、雨の三日も降ればいい」っちって。結
局、仕事がないから、雨が降ったら、うん。

中山： もう雨が降ったら仕事をやめるっていうの
は、あんまりないんですよ、ほんと。ね
え。この荷役の世界では、風が吹いたり、天
気が悪かったりしたら、「荒天待ち」っちっ
て、逆に1割かなんか、割り増しが付いた
んですね。

渋谷： ああ、「アブレ」っちっていいよったです
ね。

中山： (笑う)。そう。アブレとか、途中で荷役が
できないほど時化で、まあ時化れば、天気が
崩れること「時化る」というんですけど。時
化れば別ですけど。通常の雨ぐらいで中止に
なるってことは、そんなのはありませんね。

渋谷： 酒屋さんも、たくさんありましたよ、この
辺。みんな仕事が終わって、カクウチ（角
打）して帰るですからね。

中山： 酒屋さんの数は、異常に多かった。

田上： 稼いだお金がそのまま。

近石： 酒屋って、呑み屋ですか。

渋谷： いや、いや。酒屋さん。

中山： 普通の酒屋さん。カクウチって、立ち呑み
ですね。

渋谷： 一合枰のね、角にね、塩をちょっとね。そ

して、長居はしたらいけないですよ、ここで。えっと、塩つけてもらってから、ちょっと吞んで、さっと出らんないけん。

中山： 今なら、まったく違反ですよ。衛生上とかなんとかいって。

海運業の仕組み

田上： われわれが分からないのはですね、疑問となるのは、そういう荷役や輸送などに携わる人たちと、それを運んでもらう荷主―石炭購入者との関係を総合的に把握するのは、一体どこの会社なのかということです。例えば、Aという貨車1つの分を船に積んで運ぶ石炭の売買契約が成立したときに全体を統括っていいでしょうか、「はい、ここのゴンゾウはここの会社に」ってというような、トータルで見るのは、どこの会社なんですか。

中山： いや、それはですね。各々の、例えば、わたしどもでしたら、わたしどもが持ってる荷主さんっていうのがいるんですね。それが商社であったり、炭鉱のほうの、炭鉱側であったりするんですね。昔は炭鉱も、要するにわたしたちみたいな会社を出先で、要するにあれとして使うために、わたしたちはこうお客さんになるんですけど。向こうは作業させるために、契約というのがあって。もちろん、あの契約書はありませんよ（笑う）。口約束ですから。口約束ですね。

田上： はあ、凄いなあ。

中山： はい。「あなたに仕事をさせますよ」ってことは、それは今の契約書よりもっと、その一言のほうが大きかったかも分かりません。はい。

田上： それを反故にするようだと、もう仕事できないということですか。

中山： はい。「それをあっちにやるけど、お前の仕事はこっちにさせるぞ」ということになる、今いう「花と龍」の世界の、抗争という

ことになるんです。ということが、起きかねませんよね。はい、はい、はい。

田上： 商社が炭鉱の人たちと直接つながってるのは？

中山： 会社です。

田上： 会社。五菱さんとか？

中山： はい。荷役会社です。

田上： 荷役会社？

中山： はい。

田上： 海運会社は荷役の免許を持ってるから、海運会社でもいい訳ですね。

中山： 海運、海運できるような免許持ってる会社はいい訳ですね。

田上： 荷役もできる。じゃあ、五菱さんが、さらにその全体を取りまとめるような海運会社のところから、「陸のゴンゾウを出してくださいよ」っていう関係じゃなくて？

中山： はい。

田上： こう、荷主さんと、こちらの。

中山： そうです。

田上： すると、営業もやらなくちゃいけない？

中山： はい。そうですね。

田上： しっかりとした仕事をして、返すしかないという。

中山： はい、はい。

田上： ああ、そうですか。それは。

中山： それは、もう今でも変わりません。

近石： ああ、複雑ですねえ。そうすると、ひとつの大きな親会社があって、そこがこうやっていくのかと思った。

中山： いやあ。そういうふうに通括したものは、ほとんどないんですね。だから、独占というものができませんですね。

中小荷役業者の統合

中山： で、昭和39年ぐらいに行政指導が初めてありましてですね。小さい、今いう五菱、五菱商店であるとか、沖本（おきもと）組、

それから丸善（まるよし）、それを7社ぐらい集めて、ね、洞海湾埠頭株式会社っていうところに、免許一本にしたんです。ただし、「仕事は7社別々にやっていいですよ」って。で、その中で残ったのが、今、五菱だけです。だから、今いう洞海湾埠頭株式会社っていうのの免許をそのまんま受けて。後に行政指導で。はい。わたしの方が五菱として引き継いだんですね。

森： 荷役会社を。

近石： 包括の法人みたいなのを創り上げた。

中山： そうです。7社をいっぺんに集めてですね。会社の、要するに淘汰した訳ですね。その中でも、どんどん、どんどん仕事を、その7社あって、1つの仕事の免許だったんですけど、7社自然となくなって、五菱1軒しか残っていないという状況になりましたんで。いわゆる、運輸局の方が、「五菱さん、もうこの免許はお宅のあれにしてください」ということで、行政指導でそうなったんですね。

森： 第一港運の、その沖仲仕を扱ってるような会社も、合同するっていうようなことはあるんですか。

中山： だから、ああいう会社はもう統合のしようがないんですね。もうそれなりに、もう大き過ぎるから。なんでもできるじゃないですか。だから、合併で吸収して、することはできても、その吸収だったら、もう自然にほったらかしとった方が自分の負担にならないじゃないですか。小さいところは、一生懸命まだ残ろうとして、あがきますから、1つになってでも頑張ろうとしたんですけど。今度大きいところは逆に、そういう荷物、わざわざしよい込むことないんですよ。だもんで、ほっといたら、あとで自然淘汰されるという形ですね。

森： じゃあ、第一港運と鶴丸が一緒になるとかそういうことはない訳ですね。

中山： そういうことは、先ずありません。

渋谷： ないですね（笑う）。

中山： そんなことになりますと。

渋谷： もうライバル同士が（笑う）。

中山： 独占企業になってしまいますから。それはもう、行政の方としてはやれない、やらないですよ。

荷主との契約

藤川： 荷主さんから、荷役会社が仕事を請け負いますよね、荷物を。で、その荷役のゴンゾウさんたちが、どの船に乗って、乗せるって、なんとか海運を使うとか、そういうのは誰が決めるんですか。

中山： それはですねえ。輸送するのもやっぱり全部荷主さんとの契約です。

藤川： この荷物に対して、荷役さんはこれを使う。

中山： はい。荷役会社は荷役しかやりませんから。

藤川： で、荷主さんはまた、船の会社とも契約して。

中山： だから、総合的な仕事をされてるとこは1つなんですけど、契約は別々です。荷役がいくら、運送がいくらっていう。

藤川： だから、ゴンゾウさんたちは、この運送会社、海運の会社から会社の船に乗せるってことは分かってるけど。

中山： はい。その会社からもらってる訳じゃないんです。自分の所属してる荷役会社から荷役料を。

藤川： だから、船の人たちっていうのは、相手が変わる訳ですよ、仕事が変われば。

中山： はい、はい。だから、船の人は、いわゆる、海運会社に所属してる。

藤川： で、ゴンゾウさんが、この荷物のときは、この仕事に関しては、この海運会社の船に乗せるけど。

中山： それは、おんなじ船が、違う荷主さんの荷物を運んで来るともありますから。だか

ら、必ずしもゴンゾウさんが最初から知って
る訳じゃないんです。やっぱり、作業の指示
があって、上から流れてくる。で、その指示
のもとに、「今日はこの船とこの船を荷役し
ますよ」っていうことで。それがどこの海運
に所属してても、それは関係は、直接には関
係ないんです。知り合いであるということ
はありますけれども。

藤川： お金の関係はない。

中山： それでないといけないということでは、お
金のやりとりの関係はないんですね。

ウロさんのこと

田上： あの、沖ウリってありましたね。

中山： 沖ウロさん。売りと書いて、たぶんウロだ
ろうと。

田上： 昨日もうかがいましたけど、水とか、食料。

中山： はい。雑貨ですね。

田上： それから魚、もう別々ですか。

中山： はい。

渋谷： わたし、鮮魚は覚えてないですね。

中山： 鮮魚はですね、やっぱり扱わないんです
よ。やっぱりそのさばくっていう。

渋谷： うん。干物のような。

中山： 技術が要りますから。鮮魚を扱ってる人
は、沖ウロさんの中には、あんまりいないで
す。だから、雑貨と、それから、いわゆる、
いわゆる日常の食品。味噌、醤油であるとか
ですね。

田上： 免許はどうするんですか。

中山： いや、あれは免許、多分なかったんじゃ
ないんですか。

渋谷： 要るん。要るん……あ、そうですか。

田上： じゃあ、何をやっても。

中山： わたしはなかったと思います。

渋谷： いや、わたし、あのほら、あの人がしよっ
たやないですか。セブン-イレブンの松島
……。

中山： うん。松島さん。

渋谷： 松島さんがね。ほいで、米とか醤油とか、
味噌とかね、あんなの資格が要るでしょう。

中山： いや。米を売ったり、お酒を売ったりする
資格は要るんですよ。だから、松島さんが自
分の親戚の人に、あれを、「あのお前、陸上
は俺んとこの家が、本家がするから、お前た
ちは、海上でウロさんをして、生活を立てな
さい」というふうにしたんで。だけど、松島
さんは兼ねてたんですね、持ってたんですね。

渋谷： ウロさんは別やったですね。

中山： うん。だから水ウロさんというのは、多分
ねえ、水道局から関連してあったと思うん
ですね。

渋谷： 汽船給水っていうのは、また違うんですか。

中山： いや、昔はおんなじだったと思います。そ
れが進化してると思います。はい。だから、
昔はそれこそタンクのですね、そのまま船に
したような、水ウロさんというのがいらっ
しゃってですね。だから、その関係で、ニシ
クラさんなんか、そこの税関に入ったでしょ
う。だからね、あれ多分、水道局の公務員
じゃなかったんですかねえ。

渋谷： なんとか、普通の船会社っていったですよ。

中山： ほんと。

渋谷： うん。ほいで、「面接なしでから入れ
た」っちって。

中山： だから、そしたら、その会社がね、多分、
そういう資格を持ってたんです。

渋谷： はあ、そうでしょうね。

中山： 水道局かどっかと、なんかとつながる資格
を持ってたんですよ、多分。じゃないと、多
分あんなふうにはうまく転職できませんから。
だから、その会社がなくなるから、じゃあ、
この就職口はそっちの方でということになっ
たんじゃないでしょうかね。

渋谷： あの方は、いいことしたんですねえ。

中山： うまく転職しましたですよ。わたしも

知らなかったです。